

容堂を投げ飛ばす

履歴によると、天保元（一八三〇）年に山内家の南御屋敷へ容堂の実父に召され、吉井源太は「岩に蘭」の絵を描いた。

これは満四歳、まだ徳一郎と名乗っていた時だ。その出来がすばらしかったことに加え、幼い子が描いた珍しさだろう、三条公に献上されて観賞いただいたと書かれている。

三条公は、年代から考えて、第二十九代三条実万だろうと考えられる。正室は土佐藩第十代藩主・山内豊策の娘で、その間に生まれたのが三条実美である。

容堂もまた、実万の養女を正室に迎えており、土佐山内家とは深いつながりがあった。

ちなみにこの三条実万・

実美親子は、京都御所のすぐ東北隣にある梨木神社に祭られている。京都三名水の一つ、「染井の水」が出るところとしても有名で、いつも人が汲みに来ている。京都を訪ねる際に寄るのも良いのではないかと思う。

三条公からは、御褒美として藤波三位の御歌を賜った、とある。藤波三位は、藤波光忠のことと思われる。光忠は、やはり山内豊策の養女を正室に迎えている。

日記によると、御歌を賜ったのはごく内々のことであつたという。また、この御歌は神棚に大事にしまいすぎて、台風の時、穴があった屋根から水が漏れ、朽ち果ててしまったと書いて

ある。源太は大切にしていただろうから、残念なことだ。

これと同じころ、藩邸で相撲が行われたことがあった。徳一郎が勝ち抜くのを見て、幼い容堂公が挑んできた。徳一郎は遠慮せず投

げ飛ばし、悪いことに頭をぶつけて、泣き出してしまった。その後、藩邸では、「若様を泣かしたのは徳一郎だけだ」と言われたそう

だ。二十三歳のときは、地元で洪水が起き、祖父、父と

ともに人命救助に活躍した。嘉永二（一八四九）年のことである。

七月十一日に仁淀川が氾濫。堤防が約一キロにわたって決壊し、多くの人々が流されて溺れ、家屋も流失した。

このとき源太たちは、持ち合わせの漁船で人々を救助し、自宅敷地に運び入れた。逃げ込んでくる人も合わせると、約一千人を助けたという。

持ち合わせの米、麦、雑穀を炊き出し、三日間続けた。この年の十一月には藩政府より召し出されて、祖父は御酒を、父と自分は御蔵米八斗を賜ったと書かれている。

仁淀川での人命救助などからは、財物を惜しまず投げだした一家の姿が浮かび上がる。若い源太にとって、後々の生き方に影響する出来事だったのでないだろうか。

（京大大学院研修員、京都府在住）



三条実万・実美親子を祭る梨木神社
(京都市上京区)